時崎 久夫　外国語学部教授

泣き虫しょったんの奇跡

瀬川晶司著

講談社／2006

［796‖Se16］

第2開架閲覧室

完全版

講談社文庫／2010

［B796‖Se16］

文庫本コーナー

「26歳の誕生日までに四段になれなければ退会」。この将棋連盟の規則で、勝負に敗れ、一生プロの棋士になれないと絶望した著者は、泣きながら夜の街をさまよい、走ってくる車に飛び込もうと歩道に立つ足に力を込める。

小学校での先生との出会い、ライバルと目指した棋士への夢。養成機関での過酷な戦いに敗れて26歳で「ゼロになった」著者は、空白の後、大学夜間部に入学して年下の同級生と学び、会社員となる。かつてのライバルと盤を挟んで将棋を指す喜びをよみがえらせ、アマチュアとしてプロ棋士と対戦。勝率7割の実績を元に大勢の応援する声とともに将棋連盟にプロ入りを嘆願。規則を動かして試験将棋に勝ち、35歳でプロになるまでのノンフィクション。著者を見守り、支える人々。先生、父親と家族、友人、アマチュア仲間、そしてプロ棋士たちの思い。「再生」という題がつけられた第四章は特に美しい。

単行本はプロになるところまでの物語だが、実はこのプロは期限付きであった。ここからさらに3年の続章が「完全版」と題した文庫本に収められている。しかし、物語の統一性から、できればまず単行本を読んでもらいたい。文庫本から読む方は、単行本の「あとがき」にあたる、「今だから言えること」までだけを読んで、一晩寝たあとに新しい第六章を読むのがよいと思う。

あなたが教師になりたいのなら、この苅間澤先生は一人のモデルになるだろう。あなたが何かに挫折したのなら、この物語は再生の美しさを教えてくれる。不可能が可能になる、そんなことが本当にあることを教えてくれる。

しまった、僕はこの本について考えるだけで涙が止まらなくなってしまうんだった。

李 景珉　文化学部教授

歴史とは何か

E. H. カー著

清水幾太郎訳

岩波書店／1962（岩波新書）

［201‖C22］

文庫本コーナー

歴史とは、現在と過去との対話である。過去は過去のゆえに問題となるのではなく、現在にとって意味があるから問題になる。現在は、孤立した現在においてではなく、過去との関係を通じて明らかになる。現在が未来に食い込むにつれて過去はその姿を新しくし、その意味を変化していく。現代の新しさを語る人は過去を見る目も新しくなっていかねばならない。過去を見る目が新しくならないかぎり、現代の新しさを本当に掴めないであろう。著者、カーは過去を語りながら、現在が未来へ食い込んでいく、その尖端にわれわれを立たせる。

19世紀の歴史家たちは、事実の崇拝ともみられる姿勢で歴史を研究していた。歴史家の任務はひたすら事実を尊重して、自分の主観を排除して過去の事実をあるがまま再現することと思っていた。しかし、カーによれば、歴史的事実とは単純な過去の事実の再現ではなく、歴史家が、その事実の重要性を認めて自分の解釈によって再構成していくことであり、それこそ歴史的事実となる。歴史は、歴史家の現在の価値観の反映であり、過去の事実と歴史家の解釈の結合で成立する。歴史は現在と過去との絶えることのない「対話」の産物なのである。

したがって、歴史家の仕事を理解することは極めて重要になる。歴史家が扱っている事実の研究を始めるに先立って、その歴史家を知らねばならない。歴史的事実とともに歴史家の社会的立場をぬきにしては、「歴史」はなりたたない。個人が社会の産物である以上、個人を取り巻く環境、その見解を知ることが大事である。歴史家と歴史的事実が対話するには、事実の前提と同様に事実を作る諸条件にも目を向ける必要がある。事実と価値、社会と個人という無限の連鎖を捉える眼目が求められる。歴史上の事実というものは、歴史家が、これを創造するまではどの歴史家にとっても存在するものではない。歴史家が、過去の諸事件を原因結果の整然たる連鎖として整理し、歴史を作るのである。

そして、歴史は、過去に対する建設的な見解であり、単に進歩の記録ではなく、「進歩する科学」であり、未来を志向するものなのである。過去を発展的に解釈することが歴史の必然的役割である。歴史における未来への方向感覚があってこそ、われわれは過去の諸事件に「秩序」を与え、これを解釈することができる。まさに歴史家は、過去を推測し、未来を想起する。未来だけが、過去を解釈する鍵を与えてくれるのである。

過去が未来を明らかにし、未来が過去を明らかにする。それこそ歴史であり、歴史を明らかにすることなのである。過去、現在、未来はつきることのない歴史の鎖のうちで結ばれている。

また、文明の誕生というのは、一つの出発点であり、したがって文明は、発明されたものではなく、限りなく長い緩やかな発展の過程に他ならない。人間は、過去の経験を蓄積することによって自分の潜在能力を発展させていく。進歩の時代があるように、退歩の時代もある。没落の時代とみられるものも、新しい前進の始まりと見えるのもある。こういう時代を通過しつつあるのである。

著者は、歴史を自由に向かう進歩と考え、絶えず「歴史とはなにか」を問い続ける姿勢をわれわれに見せてくれている。難しい事柄を静かな口調でたんたんと述べており、彼の思想の表れでもある。

カーは、イギリス人で1892年生まれで、中年までは外交官であった。その後、研究者となり、国際政治、歴史を専攻した。『危機の20年－1919－1939』などを著したが、1982年に亡くなる。

私は、学生時代にこの本に出会った。当時は歴史哲学書の一つとして、みなが読んでいたから、私も手に取ったという記憶がある。ところが、その後10年以上経ってから読み返し、その軽妙な筆致に感銘を受けた。そして、何度か精読した。最近はゼミでも学生たちと輪読している。日本語の訳文には理解し難いところも多く、不満な人には英文の原書（E. H. Carr, What is History, Penguin Books 文化学部図書［201.1‖C22］）を同時にめくってみることを薦めたいと思う。